

人文社会科学部後援会事業実施報告書

申請者氏名：伊藤哲司

申請 No. 1-43（事業費）

事業区分：学生の教育研究活動支援

対象学年：3年次7人 4年次以上9人（うち支出者16人）

内容

報告項目：伊藤哲司ゼミ合宿（2023年9月5日～7日、於千葉県九十九里町）

報告内容：以下に記述

海辺の町の環境変化に関わるインタビュー調査を中心としたゼミ合宿

現代社会学科国際・地域共創メジャー教授 伊藤哲司

1. ゼミ合宿のねらいとテーマ、準備状況

気候変動などによる環境の変化が、私たちの生活にも大きな影響を及ぼしつつある。自然環境の変化により敏感であると思われる海辺の町では、その影響はどうだろうか。そのことをテーマに、ゼミ全体でインタビュー調査を実施してみることにした。同時にそのための方法論を学ぶことも意図した。ゼミ生たちが選んだ千葉県九十九里町に出向き、2023年9月5日～7日にゼミ合宿を行った。今年度に入って、コロナ感染は落ち着いたが、そのリスクが消えたわけではなく、感染対策を十全に行った上で実施した。

九十九里町は、これまでゼミとも担当教員とも特段の関わりがなかったところである。今回は県外に行ってみたいというゼミ生たちが、複数の候補地から投票によって選定した。学生の合宿に適し比較的安く泊まれる民宿こうじやを予約することができ、合宿係となった3年生数名を中心に準備を進めた。できるだけ多くのゼミ生が参加できるように日程調整を行い、留学中であることなどやむをえない事情で参加できない5人を除き、16人のゼミ生が参加することができた。

ゼミ生同士の親睦を深め、より深い関係づくりすることも、今回のゼミ合宿のねらいである。昨年度、3年ぶりに対面でのゼミ合宿を行うことができたが、それに続くものとなり、その後のゼミ運営に好影響を与えることは間違いないと確信していた。

2. 九十九里町におけるゼミ生たちによるインタビュー調査

4つのグループに分かれて地域を歩き、インタビュー調査を行った。いわゆる縦割りで構成したグループごとに、漁業関係者や宿泊関係者などターゲットとするインタビュー協力者を決め、徒歩で散策しながらその場でインタビューの依頼をするという方法をとった。インタビュー協力への同意を文書で確認し、インタビュー内容は極力録音した。録音記録は文字起こしをし、担当教員の伊藤らが開発した「語りマップ」(Google マイマップの機能をつかった語りのマッピング)として共有した。インタビュー調査にあたっては、研究倫理にも関わるセンシティブな部分を含むため、フィールドに繰り出す前に留意すべき点などについて、担当教員から入念にインストラクションを行った。

インタビュー調査は、中日の2日目に行った。宿泊している民宿から徒歩圏内という狭い地域での調査となったが、グループそれぞれお話を聞かせていただける協力者を見つけことができ、あらかじめ用意したいくつかの質問を投げかけ、その応答である語りに耳を傾けることになった。可能な範囲で音声記録も残し、それを Office365 に付随している Stream を用いた機械文字起こしを行って、主な語りを抽出した。それを「語りマップ」作成の手順(担当教員らが作成)に従ってマッピングし、共有することができた。

3. 課題と今後の展開

宿泊した民宿こうじやは、長年学生の合宿等を受け入れてきたところで、宿の方々も柔軟で理解があり、とても親切に接してくださった。2日目夜には、材料を自分たちで買出しバーベキューを行ったのだが、そのときも小雨降る中やりやすいよう便宜を図ってくれた。古い宿ではあったが、ゼミ合宿の宿泊場所としては値段も手頃で適したところであった。なお宿のご主人(女性)は、学生たちのインタビュー調査にも応えてくれた。

インタビュー調査の方法論を学び実践するという点についても、ひととおりのことはできた。ただし、その理解を深めつつ十全にやりきったという感じのところまでには至らなかった。3日間という時間の短さもあり実践としては十分ではなかったところもあるし、今回掲げたテーマにゼミ生の関心が必ずしももともと強くあったわけではないということもあったのだろう。「語りマップ」についてもさらに十全に実践し、その意義を理解してほしいというのが、担当教員からみた課題である。

今回、多くのゼミ生が参加したことで、関係づくりが大きく進んだことは間違いない。伊藤ゼミでは、いくつもの研究プロジェクトを動かしており、ゼミ生たちが協力しあっていっそうコミットしてくことを期待したい。同時に各自の研究力アップにもつなげたい。

